

都道府県別賞一等

わたしたちのくらしと生命保険

愛媛県 宇和島市立城北中学校 三学年

尾崎 晴真

僕の父は、トラック運転士だった。毎日朝早く家を出て、夜遅くまで大きなトラックを運転していた。家に帰ってくると、くたくたになっているのに、僕の話をちゃんと聞いてくれた。そんな父の背中からは、今でも僕の中に強く残っている。父は僕が小学四年生のとき、事故で亡くなった。高速道路での多重事故だったと聞いている。ニュースで「大型トラックが絡む事故」と報道されていて、それが父だとは信じられなかった。母が泣きながら電話をしている姿を見て、やっと現実を受け止めた。その日から、僕の生活は大きく変わった。毎日一緒に笑っていた父がいない。運動会も、誕生日も、父の姿はもうない。家の中が静かで、空気が冷たく感じた。でも、ある日、母が僕に言った。「お父さんね、生命保険に入ってくれてたの。」生命保険という言葉は、当時の僕にはよくわからなかった。でも、母はそれがあったから、家を引っ越さずにすんだし、僕が高校にも大学にも行けるかもしれないと話してくれた。父は自分に何かあったときのために、僕と母の将来を考えて、生命保険に入っていたのだ。その話を聞いたとき、胸がぎゅつとなった。父は、いつも僕たちのことを考えていた。生きているときも、いなくなつたあとも。トラック運転士という危険のある仕事をしていた父だからこそ、万が一に備えてくれたのだと思う。トラック運転士は、僕たちの生活に欠かせない仕事だ。食べ物や日用品、家具、建築資材など、いろいろな物を遠くから運んでくれる。けれど、長距離運転はとても大変で、事故のリスクも高い。僕は、父が毎日どれほどの責任を持って働いていたのか、今になって少しわかるようになってきた。

僕は今、中学三年生になった。将来の夢はまだはっきりしていない。でも、一つだけ決めていることがある。それは、「誰かのために生きる」ということだ。父がそうしてくれたように、僕も大切な人を守るような大人になりたい。そして、生命保険というものの大切さも、僕は知った。目に見えないけれど、確かに家族を守ってくれるもの。お金のことはまだよくわからないけれど、父の思いがこもった保険が、僕たちを支えてくれていることは、はっきりとわかる。これから先、どんなことがあっても、僕は父のように強く、優しく、思いやりのある人間になりたい。そして、誰かを支えられる大人になりたいと思う。

そして僕は、人に優しくして大人になったら生命保険に入ろうと思う。